

H30 海外臨床実習

番号	氏名	渡航先	国・地域	渡航先での受入期間
1	K. I	ロンドン大学 QM校	イギリス	H31/1/7-H31/2/1
2	K. T	ロンドン大学 QM校	イギリス	H31/1/7-H31/2/1

平成30年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 5年

氏名 K. I

【留学先大学名】 Queen Mary, University of London

【実習先病院】 Whipps Cross Hospital, (金曜日のみ)St. Bartholomew's hospital

【診療科】 Cardiology

【実習期間】 2019年1月7日～2019年2月1日

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1 週目	学生登録 外来見学	外来見学 心エコー	心エコー見 学	外来見学 学生講義	カテーテル 見学、講義
2 週目	病棟回診 カンファレ ンス	病棟回診 カンファレ ンス	Cardiology Lecture	病棟回診 カンファレ ンス	カテーテ ル、心臓血 管外科手術 見学
3 週目	病棟回診	外来見学 ペースメー カー外来	病棟回診	外来見学 ECG 見学	カテーテル 見学
4 週目	外来見学	病棟回診 カンファ	心エコー見 学	ペースメー カー外来	カテーテル 見学

1 実習目的

イギリスには National Health Service(以下 NHS)という日本の国民皆保険のような制度がある。日本の皆保険では保険料の支払いや自己負担が存在するが、NHSはほぼすべてが公費で賄われ、利用者の自己負担は無料かあっても少額である。ただし日本のようにどの医療施設でも使えるわけではなく、NHSの関連施設でしか利用できない。また利用するためには住所に応じて General Practitioner(以下 GP)をかかりつけ医として指定し、診療を受ける際にはまずかかりつけの GP に診てもらい、必要に応じて専門医へ紹介するという流れになる。今回の実習の主な目的の一つはこの NHS が臨床においてどのように機能しているのかを学ぶことである。

また近年日本の医療現場において医師の過重労働が問題視されてきている。医療の質を維持しつつ労働負担を減らすためには業務の効率化が必要不可欠である。今回の実習でイギリスの病院における医師の労働体制を見聞きし、日本のそれと比較して将来医師として働く際に役立てたいと思っている。

さらに今回の実習地であるイギリスは英語圏であり、普段中々接することができな

い医学英語に触れる貴重な機会である。特に診療やスタッフ間のやりとりに関する表現などを習得する。

2 実習内容

今回は主にロンドンの Whipps Cross Hospital にて Cardiology の実習を行ったが、金曜日のみカテーテル見学のため St. Bartholomew's Hospital で行った。

外来見学では指導教官の外来診察の様子を見学することができ、診察に関する英単語やフレーズなどを多く聞くことができた。また外来にくる患者は基本的に GP からの紹介かフォローアップの患者なので比較的スムーズに進んでいたが、やはり患者の数は多く、常に予約は埋まっていた。指導教官いわく、本来は初診 30 分、再診 20 分位必要なところ、それぞれ 20 分、15 分枠で取られており、外来では病歴聴取がメインで身体診察は聴診と浮腫の確認のみ行っていた。本来はもっと詳しくやるべきだが、診断の 70%は病歴、20%は身体診察、10%は検査で決まるとのことで、現状を加味して病歴聴取に重きを置いていると言っていた。このような外来の混雑を解消するため、特別な資格をもった看護師も外来を行っていた。患者のフォローアップや GP からの紹介があれば診察も行っていたが、検査や治療方針などは医師と相談した上で決定していた。日本でも看護師資格の適応拡大は医師不足を解消するための効果的な解決策になりそうだと感じた。

病棟では毎朝行われるコンサルタントと研修医による病棟回診について見学・実習を行った。病棟は奥行きのある部屋の左右にベッドが並べられてそれぞれをカーテンで区切れるようになっていたが、診察等の時以外は常に開けっ放しにしているのが普通で、日本とは対照的だと感じた。また診察にあたる医師が私服で白衣は着ていないことに驚いた。イギリスでは病院内で白衣は感染の原因になるという報告が挙げたことから現在ではだれも着用しておらず、病棟では肘より下にかからない半袖の服装であれば大丈夫という事だった。一方で医療者や患者を含めてマスクを着けている人は一切おらず、オペ室以外でマスク着用姿を見ることはなかった。感染対策的に問題はないのかと疑問におもったが、院内感染はコントロールされていたように感じた。回診は2つのグループで行い、各患者に応じて問診や診察、検査や治療方針の説明などを行っていた。適宜現地の学生と共に問診や聴診、その他パルスオキシメーターでの測定などを行った。回診では英語によるカルテの記載方法やそれに関わる表現も知ることができた。回診後はミーティングルームに集まって 30 分ほどかけて病棟全体の患者情報を共有していた。また毎週木曜日には研修医が発表するインシデント報告会も行っていた。毎回ピザやフルーツ、飲み物が用意されており、この報告会以外でもミーティングには欠かさず付属しており、皆飲み食いしながらミーティングを

聞いていた。時間を節約するという観点から非常に優れていると思い、日本のミーティングも導入するべきだと思った。

外来見学や病棟回診以外にも心エコー検査や心電図検査、ペースメーカー検査などでも見学を行った。それぞれの検査技師の方に付いて、患者の呼び込みから検査の進行、レポートの書き方などを学んだ。特に検査に関する英単語や、患者とのやり取りにおける表現などに関する学びが多かった。

金曜日は **St. Bartholomew's Hospital** という病院で指導教官とそのチームメンバーによるカテーテル検査・治療の見学を行った。日本でのクリクラでは循環器内科を回れなかったためカテーテル手技はほとんど見たことがなかったので、モニター室で技師の方が教えてくれて非常に有難かった。また1件カテーテル中に心停止になったケース（心拍再開）に遭遇し、緊急時の対応現場を見ることができた。3週目の金曜日は心臓血管外科にて手術見学を行った。肥大型心筋症に対する心筋切除術のケースで、麻酔の導入から終わりまで全て見学することができた。また麻酔の段階でマスク換気と挿管を行った。

3 感想・今後の抱負

今回の実習を通じて多くのことを学んだが、まず NHS などの医療システムに関して感じたことを述べたい。前述のとおり、NHS ではほぼ無料で医療を受けることができるが、指定された施設でしか利用できないため特にロンドンなどの都市部では患者があふれている。GP の紹介から専門医の受診まで 2 ヶ月ほど待っている人もいた。日本では長くても数時間待てば専門医の診察を保険診療で受けることができるのでこの点はかなり優れているように感じる。実習を行った病院では前述のように循環器専門の看護師が外来を行っていたり、その他にも患者紹介のスケジュール調整などは専属のコーディネーターが行っていたり、タイピングが苦手な医師用に音声入力システム(医師がマイクで録音後タイピストが入力)が導入されているなど、業務を効率よく行うための工夫が数多くみられた。業務体系の棲み分けがきっちりとされており人的リソースの利用においては日本よりも効率的だと感じた。一方で電子カルテの導入などの電子化は 3 年前に始まったばかりであり、システムトラブルなどが多かった。またスタッフも機器の扱いに慣れていないなど、システム面においては日本の方が優れていると感じたので、日本において業務の効率化を図ればより良い効率で医療を提供できるのではないかと思った。将来医師として働く際には医療のそのような側面にも目を向けていきたいと思う。

また英語に関してはかなりの成果があったと思う。今回は一人での実習で日本語を

一切使うことなく過ごすことができたのが一番の理由だったと思われる。ロンドンには海外から働きに来ている人も多く、様々なアクセントやレベルの英語が飛び交っていた。特に外来見学や病棟回診で遭遇した表現やフレーズは現地以外では中々習得することができないので非常に貴重である。今後も医学英語の勉強に励みたい。

最後に最も印象に残ったのは NHS が患者に課している義務である。

1. 市民は自分自身および家族の健康に関心を持ち、責任を持つべきである
2. 市民は NHS 制度へのアクセス拠点となる GP 医に登録すべきである
3. NHS スタッフおよび他の患者へ敬意を払うべきである（暴力行為は起訴・診療拒否される）
4. 自己の状況や健康状態は正確に申告すべきである
5. アポイントメントを守り、キャンセルは常識的に行うべきである。そうでなければ最長の待ち時間にもなりえる
6. 患者は同意したならば治療手段に従い、それが難しい場合はそれをスタッフに告げるべきである
7. ワクチン接種などの公衆衛生プログラムに参加すべきである
8. 臓器提供に関する本人意思を表示すべきである
9. 受けた治療や病状変化について、副作用などの良い面も悪い面もフィードバックを行うべきである（匿名のフィードバック手法が提供される）

上記のような内容はサービスが過剰な日本においてあまり意識されることがない事柄だが、今後医療の供給が追い付かなくなると見込まれている現状において、非常に重要だと個人的には思っている。患者の要求全てを受け入れてはいつまで経っても供給は追い付かず、医療費も膨大になる。限られたリソースを効率的に運用するためには患者の教育や病院や医療者の責任範囲の明確化が大事なのではないかと思うようになった。今後医師として働く上で常に考えていきたい。

4 謝辞

今回の実習に際して様々な方から支援をいただきました。実習に関する手続きにてお世話になった教育センターの西川様、推薦状を書いてくださった和佐先生および河盛先生、奨学金関係の手続きでお世話になった教務の前田様、和高様、永海様。そして多大なるご支援をしてくださった岸本忠三先生に感謝を申し上げたいと思います。皆様の支援無くしてこの実習はありえなかったと思われます。重ねてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

平成30年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 5年
K.T.

[留学先大学名] Queen Mary, University of London (London, United Kingdom)

[実習先病院] St. Bartholomew's hospital

[診療科] Cardiology

[渡航期間] 2019年1月4日 ～ 2019年2月2日

[実習スケジュール]

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1週目 (Intervention team)	学生登録/病院紹介	他職種会議/ 病棟回診	病棟回診/ 救急処置室見学	病棟回診/ 救急処置室見学	病棟回診/ 救急処置室見学
2週目 (Electrophysiology team)	病棟回診 (現地医学部生同行)	カテーテル手術見学 (ICD 埋め込み) /心電図について講義	病棟回診/ Specialist registrar による研究発表	症例紹介会議/ カテーテル手術見学(上室性頻拍にたいするアプローチ)	病棟回診/ 心電図訓練 (現地医学部生と議論)
3週目 (General Cardiology team)	病棟回診/ 現地医学部生と症例に関する議論	病棟回診/ リソソーム異常による疾患に関する講義	病棟回診(現地医学部生同行)	病棟回診/ 診察練習 (現地医学部生同行)	病棟回診/ 診察練習(初期研修医監督)
4週目 (TAVI team, Cardiothoracic Surgery team)	TAVI(Trans-catheter Aortic Valve Implantation)見学	TAVI(Trans-catheter Aortic Valve Implantation)見学	心臓外科手術見学 冠動脈バイパス手術	TAVI(Trans-catheter Aortic Valve Implantation)見学	心臓外科手術見学 中隔心筋切除術

[実習目的]

イギリスの国民保健サービスを担う NHS 系列の病院では、国民がほぼ無料で医療サービスを受けることができる。そして、多くの国民が NHS 系列の病院を利用するため、サービスの需要が供給に対して過剰となっている。以上のような現状から、医療サービスへの

アクセスが悪く、高額な医療費を支払ってでも私立病院を利用する国民が存在する。医療費の高騰が問題となっている日本と共通点があり、そのような現状において医療がどのように行われているのかを観察する。

また、イギリスの病院では医師、看護師を始めとして様々な職種において多くの人種、国籍の人間が力を合わせて働いている。人口減少から労働力不足が発生する可能性が高い日本の未来において参考となる環境である。そこで、医師として必要な姿勢、知識を学ぶ。そして、そのような環境で働く方々から医療知識だけでなく、患者の方々に接する姿勢などを現場で吸収する。以上のことを目的とした。

[実習内容]

・病棟回診

入院患者を Consultant (または Professor)、Specialist Registrar、Nurse などからなる医療チームで回診していく。それぞれの患者に対して丁寧に診察、説明などを行なっているのが印象的であった。医学部生に対して、患者の前で診察をさせて発表させるなど、教育的要素も強く見られた。

・集学的治療会議 (Multi-Disciplinary Therapy meeting)

循環器内科医、心臓外科医、放射線科医などが集まって集学的治療が必要な患者の情報を共有して議論する。Specialist Registrar が患者の情報を発表すると、各分野の先生方によって活発に議論が行われていた。

・救急処置室見学

救急患者が運ばれてきてから、状況確認、問診 (可能な場合)、身体診察、診断と迅速な対応を学んだ。症例によっては緊急カテーテル手術に移行した例もあり、心電図から梗塞が起こっている冠動脈を予測することなどを教わった。

・Specialist Registrar による研究発表

イギリスで最古に病院であると同時に、医学教育においても名高い当病院において、日本における後期研修医にあたる Specialist Registrar が行う研究発表を拝聴した。一ヶ月前に Journal of the American College of Cardiology に掲載された論文を元に心臓再同期治療 (CRT) におけるヒス束ペーシングについて検討したり、自施設で行われたカテーテル手術における有害事象を詳細に検討するなど多忙な臨床業務に加えて臨床研究、技術の改善に力を入れていることが分かった。

・現地医学部生と症例に関する議論

当病院では、ロンドン大学クイーンメアリー校の医学部に当たる Barts and the London, School of Medicine and Dentistry の医学部生が臨床実習を行なっている。2017年の The Guardian によるランキングでは全英で第二位となった医学部で、本実習で出会った学生は全員、高い意識を持って臨床実習に臨んでいると感じられた。

・TAVI および心臓外科手術見学

医師の方々だけでなく、看護師、Electro-physiologist のの方々などに丁寧にご指導いただいた。心臓外科医の Mr. Shipolimi には、お忙しい中非常に多くの時間を割いて手術、およびそれに用いる装置などについて詳しく説明していただいた。

[実習の成果]

実際の臨床現場における職業訓練としての役割が強いイギリスの実習において、心電図の読み方、患者に対する問診、身体診察など多くのことを学ばせていただいた。指導医の先生方は非常に多忙な中、こちらがお願いしたことは可能な限り挑戦させてくださり、積極的な姿勢を持ち続けることの大切さを再確認した。

日本の病院と大きく違う点のひとつとして、現地の言葉を話せない患者が多くいることが挙げられる。ヨーロッパ、アジアなどから移民してきて、英語をほとんど話せないまま生活してきた患者に対して通訳を介して診察する様子などが多く見受けられた。医療を提供する側の人間も様々な国籍から成っている。そのような中で、できる限り相手の状況、要望を把握して、配慮しながら診察、治療を行なっていく様子は印象深く、そのような姿勢の大切さを実感した。

そして、英語が母国語であることの利点も感じられた。国際雑誌の論文が英語で書かれていること、世界的に用いられる医療器具、治療法などの名前が英語である場合が多いことなどから、それらをそのまま理解して、利用することができる。そして、医師、看護師など病院の職員も、様々な国出身の優秀な人材が集まっていて、英語という言語が現在世界において広く普及していること、そしてその重要性を再認識した。

イギリス国内の他病院から見学に来ていた医師の方と話す機会があった。現地医学部生の中には歯科医師として働いていた人もいて、国は違っても、自らが医師として社会に貢献する方法を模索して努力している姿を間近で見ることができたのは大きな刺激となった。

[今後の抱負]

本実習中に、Consultant、Registrar などの医師だけでなく、Nurse、Electrophysiologist など様々な病院職員の方々が、お忙しいなか時間を割いて質問に答えてくださったり、ご指導して下さった。そのご恩に報いるためにも、今回の経験、知識を最大限に活かして勉学、研究に取り組み、自分が将来接することになる患者一人一人にとって良き医師であることができるように努力を続けていきたい。

具体的には、イギリスで学んだ経験、人とのつながりを活かして、日本の医療界の常識が最良だと決めつけることなく、常に改善できる部分は改善する姿勢を持ちたいと考える。それは、医療チーム内におけるコミュニケーションの方法、患者と接する姿勢、将来的には後輩の指導に対する熱意など様々な側面で活かしていくことができると確信している。そして、今回、非常に多くの人種が協力して働く素晴らしい病院、St. Bartholomew's hospital で実習をして学んだことを、これから国際化が進む日本で活かしていきたい。人種、もしくは出身国に関わらず人が評価され、切磋琢磨して働く環境に非常に大きな刺激を受けたとともに、そのような理由で差別が行われることのくだらなさ、そして、それがどれほど社会に対する大きな損失となるかを思い知らされた。近年、日本においても人種、出身国から人に対する評価を決めつけるような記事、発言が多く見受けられる。日本が、そのようなことが横行する低いレベルの国になりさがり、国際社会の中で取り残されることのないよう、医師としてだけでなく、人としても、自らの発言、行動に責任を持って生きていきたいと強く思わされた。

[謝辞]

まず、今回のイギリスにおける4週間の実習に多大なるご支援をしてくださいました岸本忠三先生に感謝を申し上げたいと存じます。本当にありがとうございました。また、教育センターの和佐勝史教授、河盛段先生、西川亜希様、および教務室教務係の前田絵美様、和高雅俊様にも、留学の準備において大変お世話になりました。そして、イギリスにおいては King's college London の大津欣也教授、Queen Mary の鈴木憲教授、St. Bartholomew's hospital で Cardiology の Consultant をしておられる Dr. Weerackody、Cardiac Surgery の Consultant をされている Mr. Shipolini、Prof. Schilling、そして多くの Specialist Registrar の方々にお忙しい中、色々なことを教えていただきました。その他にも、Medical Education Manager をされている Mr. Uddin、実習と共にした Barts and the London の医学部生など、本当に多くの方々のご支援なくして今回の実習はありえませんでした。重ね重ね、お礼を申し上げたいと存じます。ありがとうございました。